

機関番号：32511

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21700823

研究課題名 (和文) 大学の教員養成における地域の教育現場との連携協力に基づいた  
プログラム開発研究課題名 (英文) Program for the Pre-service Teachers Education based on the  
Cooperation of University and Educational System in the  
Surrounding Area.

研究代表者

大貫 麻美 (OHNUKI ASAMI)

帝京平成大学・現代ライフ学部・講師

研究者番号：40531166

研究成果の概要 (和文)：大学の教員養成に関し地域との連携協力に基づいた2つの学習プログラムを開発、実践し成果を得た。①地域の小学校における定期的かつ継続的なボランティア活動を中心としたプログラム。②科学者や科学技術に対する親近感の形成と科学的情報を正確に理解することの重要性を認知することを目的とした地域の健康福祉センターの保健士による講習を導入したプログラム。前者については実施先の小学校で学習活動支援、環境整備支援、安全対策支援のいずれでも有効であったことが示された。後者については、学生がプログラムの有効性を理解するとともに、科学者に対する先入観と実際の講師との違いを認識したことがわかった。

研究成果の概要 (英文)：Two learning programs based on the cooperation of university and educational system in the surrounding area were developed. In the program of "School Volunteer", the students who want to become teachers should be involved in volunteer work at the elementary school once a week. The informations from the elementary schools in Ichihara city showed the students' activities could work effectively in three important fields, viz. study supports, environmental maintenance and safe supports of the school children. The other program including the lecture of public health worker of the Health and Welfare Center, aim to progress in understanding science and intimacy with the scientist. Students understood the meaning of the program and admitted the difference between the preconception to the scientist and the lecturer.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野:総合領域

科研費の分科・細目:科学教育・教育工学, 教育工学

キーワード:教員養成, 初年次教育, カリキュラム・教授法開発, 大学と地域との連携

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 大学の教員養成における地域の教育実践現場との連携の重要性と帝京平成大学における実践

中央教育審議会(2006)の「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」に述べられているように、「教職は、人間の心

身の発達にかかわる専門的職業であり、その活動は、子どもたちの人格形成に大きな影響を与えるものである。近年、子どもたちの学ぶ意欲の低下や規範意識・自律心の低下、社会性の不足、いじめや不登校等の深刻な状況など、学校教育における課題は、一層複雑・多様化するとともに、LD、ADHD や高機能

自閉症等の子どもへの適切な支援といった新たな課題も生じてきている。」大学における教員養成にあっても、学校教育実践現場における諸課題について学ぶ機会を学生に提供することが要請されている。

帝京平成大学現代ライフ学部児童学科（以下、児童学科と記載）は、子どもと関わる職種、特に学校教育実践現場への就職を希望する学生が多い。そのため、設立当初の2006年度から大学がある千葉県市原市内にある小学校等での学校ボランティア活動を行ってきた。

#### （2）初年次教育の重要性と帝京平成大学における実践

高等教育を取り巻く環境変化に伴い、大学入学次の学生の状況に呼応した初年次教育の重要性が増しており、2007年には初年次教育学会が設立されている。

帝京平成大学では、建学の精神に基づきキャリア教育をも含めた少人数制クラスでの指導を4年間通して行っている。とくに、初年次にはフレッシュセミナーⅠA（前期2単位）及びフレッシュセミナーⅠB（後期2単位）が必修となっており、初年次教育の根幹を担っている。教職を志望する学生の多い児童学科においては、初年次から教職や子どもに関わる職種に就くために必要な素養の修得に資する内容を扱うこととしている。

#### （3）理科教育に関する課題とそれに呼応した学習プログラムの構築の重要性

日本の理科教育において、理科嫌いや理科嫌いという言葉が周知されるようになって久しい。2008年に改訂された小学校学習指導要領における理科の改善の基本方針はこうした状況をふまえ、「理科を学ぶことの意義や有用性を実感する機会をもたせ、科学への関心を高めること」などが柱となっている。一方で、現在の大学生は理科嫌いや理科離れが話題となっている情勢の下で児童生徒として成長してきた。

教職を志望する文系大学生の科学に関する認識について分析するとともに、それらに呼応する学習プログラムを構築することで、将来、教職に就く学生に必要な科学的素養の向上を目指す必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、まず、1で述べた背景をふまえ、大学の教員養成における地域の教育実践現場との連携協力に基づいた学習プログラムの開発を行うことにある。

次に、それらのプログラムの実践及び成果の検証をすることにある。

本研究により開発される学習プログラム

が、児童学科における教員養成のカリキュラムに有機的に組み込まれることにより、地域の教育現場における諸課題に精通し、それらの課題に対処しうる能力を備えた教員の養成を期している。

## 3. 研究の方法

まず、教職志望者としての資質能力の向上を目的として、将来、教職に就くことを志望している学生が、地域の公立小学校などにおける定期的かつ継続的なボランティア活動を行うことにより、教員としての資質・能力の向上を目指す学習プログラムの開発を行った。

次に、科学者や科学技術に対する親近感の形成と科学的情報の正確な理解の重要性を認知することを目的として、人権尊重を基盤に据えた学習プログラムを作成した。このプログラムには千葉県市原市健康福祉センターの保健士による講習を導入した。

そして、これらの学習プログラムを実施するとともに、その成果について検証した。

## 4. 研究成果

### （1）「学校ボランティア」プログラム作成

市原市教育委員会と帝京平成大学の連携協定の下、児童学科に所属する学生が履修する「学校ボランティア」（通年2単位）の科目について、以下のプログラムを作成した。

- ① 教職を志望する学生を対象とした事前指導により、学校ボランティア活動の意義を周知し、活動を希望する学生を市原市教育委員会へ紹介する。
- ② 市原市教育委員会が市内の公立小学校に調査を行い、ボランティアを希望している小学校を学生に連絡する。
- ③ 学生は、小学校長との面談を経て活動を開始し、週1回のボランティア活動を継続的に行う。また、活動日ごとの報告書を大学の担当教員へ提出する。
- ④ 活動過程において、学校ボランティア担当の大学教員が小学校へ直接訪問し、学生の活動状況を把握する。必要に応じ、個別指導を大学で行う。
- ⑤ 活動終了後に学生は活動について総合的な自己評価を行い、レポートとして提出する。学校ボランティア担当の大学教員は活動日ごとの報告書、訪問時の評価、レポート等を総合して科目としての評価をする。

以上の流れにより、教職実践の場における定期的かつ継続的なボランティア活動を行うことが可能となっている。尚、池袋キャンパスにおいても、豊島区教育委員会との連携協力、学生の居住する地域の小学校の協力等

を基盤として、同様の活動を実践している。

### (2)「学校ボランティア」プログラムの実施と成果

2009 年度に児童学科の学生がボランティア活動を実施した市原市内の公立小学校 26 校を対象として、学生の学校ボランティア活動の有効な場面を調査し、25 校から回答を得た(表 1 (大貫ら(2011)))。学生の学校ボランティア活動が学習活動支援、環境整備支援、安全対策支援のいずれでも有効であることが示されていた。中でも普通授業の支援については 25 校中 22 校が有効であったと述べており、また、個の子どもに応じた学習支援については 25 校中 21 校が有効であったとして、すべての学校がこれらの 2 項目のいずれか、あるいは双方を選択していたことがわかった。

表 1. 学校ボランティア活動が有効な場面 (大貫ら (2011))

アンケートにおける選択肢と選択した校数の合計 (アンケート回答校の総数は 25 校)

活動場面		合計
学習活動支援	普通授業の支援	22
	個の子どもに応じた学習支援	21
	行事活動の支援	17
	実技科目の支援	14
	少人数指導の支援	12
	校外学習や野外活動の支援	7
	習熟度別指導の支援	6
	その他 (クラブ活動・休み時間)	2
環境整備支援	学内で屋外の環境整備	16
	学内で屋内の環境整備	13
	学外の環境整備	3
安全対策支援	実技科目授業時の安全対策	15
	校内生活における安全対策	14
	行事活動時の安全対策	10
	校外学習や野外活動時の安全対策	5
	登下校時の安全対策	1

### (3)「学校ボランティア」に関する調査から見る学生の特徴と呼応した指導

#### ①学校ボランティア活動が初年次学生に与えた影響 (大貫ら (2011))

2010 年度に学校ボランティア活動を行った初年次学生 66 名を対象とした調査から、学校ボランティア活動が初年次学生に与えた意識の変容を分析した。主な成果を以下に示す。

調査対象である 66 名全員が学校ボランティア活動を「教師という職務について具体的に知る機会となっている」と評価していた。また、66 名中 62 名が「教育や学習支援について考える機会になっている」と回答しており、否定的な回答をした学生はいなかった。「教育や学習支援について自分の力の不足を感じる時がある」とした学生は 66 名中 61 名であり、66 名全員が「教育や学習支援について、もっと学ぶ必要性を感じる時がある」としていた。また、「教育や学習支援に関して学ぶ意欲がわいた」とする学生は 66 名中 63 名で、否定的な回答をした学生はいなかった。また、調査対象全員が、「学校ボランティア活動を行って良かったと思う」と回答しており、「学校ボランティア活動を通して学んだことがある」という選択肢に否定的な回答をした学生はいなかった。「教育に関するニュースや話題について興味・関心をもち、考えるようになった」とした学生が 83%、「特別支援教育についての興味・関心がわいた」とする学生も 83%であった。

こうした評価から、学校ボランティア活動が初年次学生にとって、教職の意義や役割を知るとともに、それらについて考える機会となっていることがわかった。それらを含めた学校ボランティア活動における多様な経験が、学生に教育や学習支援についての考えを深めさせ、学習の必要性に気づかせ、学習意欲の向上に繋がっているということが示されると同時に、それらを学生自身が高く評価していることがわかった。

#### ②文章表現に関する特徴 (大貫ら (2010)、大貫ら (2011))

①で述べたように、学校ボランティア活動は学生の学習意欲の向上や、学習の必要性に関する意識の向上に関わっていることがわかった。同じ調査時に、ボランティア活動により、大学の授業での発言やレポートに具体性がでたかどうかを調査したところ、肯定的な回答をした学生が 48%であるのに対し、どちらともいえないとする学生が 47%とほぼ同程度の割合で存在していた。

また、2009 年度前期に学校ボランティア活動を実施した学生 75 名が記述した報告書を調査対象として分析した。主な結果として、54 名の学生が漢字の誤表記もしくは誤用をしたことがわかった。また、13 名の学生が「児童」とすべきところを「生徒」と表現するなど、教育に関する用語の誤用も見られた。

初年次から学校ボランティア活動を行い、報告書の作成をすることにより、学生は教職に関する文章表現を行う経験を重ねることができるため、こうした文章表現力の向上を目的とした指導を初年次から行うことができる。

2011年度より、少人数制クラス担任によるセミナーにおいて、学生が作成した活動報告書を持参し、セミナー担任が回収、セミナーの指導において活用することができるように学習プログラムを改変した。このことにより、教職に関する文章表現力の向上を期して、調査を継続する予定である。

#### (4) 科学に関する認識に関する学生の特徴と呼応した実践

##### ① 科学に関する認識 (大貫 (2011))

児童学科の学生がもつ科学に関する認識について、49名の学生を対象として調査をした。調査内容は内閣府による世論調査「科学技術と社会に関する調査」を参考に作成した。主な結果と考察は以下の通りである。

学校教育における理科や数学が、科学的センスの育成に役立っていると考えている学生の割合が58%であり、これは2007年の世論調査の割合より高い数値であった。また、科学的研究の有意性について、78%の学生が肯定しており、そのための政策の形成に国民の参画が重要であることも62%の学生が認識していた。一方で、こうした項目について、判断を避ける傾向にある学生が、世論調査の結果よりも高い割合で存在しており、懸念されることがわかった。これは、科学技術に関する情報に関心があるとはいえない学生や、自分には科学技術分野の進歩についていくことや、それらの内容を理解することが困難であるとする傾向にある学生が過半数を占めていることとも通じる課題である。

科学者に対する態度に関する調査からは、科学者や技術者への親近感があると回答した学生は18%と低いものの、機会があれば科学者や技術者の話を聞いてみたいと思う学生は58%と過半数であることがわかった。

これらの結果をふまえると、文系大学生の理科離れは、科学の重要性を認知していないためではなく、理科の学習過程における知識・理解の修得に関する失敗経験が、理解能力に関する自己評価を低くしており、科学的情報に触れ、それを理解しようとする意欲の低下につながっていることにより生じていると考えられる。

##### ② 学生の特徴をふまえた授業実践

①で得られた結果から、学生の科学者に対する親近感の少なさや、科学技術を理解する自信のなさや課題であることが考察された。そのことを鑑み、科学者や科学技術に対する親近感の形成と、科学的情報を理解するとともに、こうした情報を正確に知ることの重要性を認知することをねらいとして、人権尊重を基盤に据えた性感染症に関する学習プログラムを実践した。具体的な内容を以下に示

す。

まず、教職等の職種では感染症に罹患している子どもや保護者に接する可能性が大いにあることを大学教員による講話で触れた。

次に、千葉縣市原健康福祉センターの保健士による講習会を通して、HIV等の性感染症に関する学習を行った。この学習においては、感染症に関して正確な知識を得るだけではなく、HIV感染者や感染者の家族による手記を代読し、それぞれの立場についてディスカッションをする活動などが行われた。

このプログラムの終了後に受講した学生を対象として行った調査において、講習会で扱った内容をまったく知らなかったとする学生は29名中3名と少なかったが、このプログラムが今後役に立つ内容であったとする学生は29名中27名と9割以上であった。また、講習会を担当した保健士が自分のイメージしていた科学者と完全に一致していたとする回答者は23名中0名、ある程度一致していたとする学生は4名と少なかった。

自由記述欄に、担当の保健士について学生自身と年代が近く、女性である専門家の存在を知ることができたことや、専門的な内容が大変理解しやすかったことなどが述べられていた。講習会の質疑応答時にも、複数の学生が具体的な事例と感染の危険性や取るべき対処法等について、詳細を尋ねる様子が見られており、科学者への親近感の形成や、科学に関する内容を理解しようとする姿勢が見られたことがわかった。

また、こうした活動の有意性を理解することで、将来教職に就くことを希望している学生が、理科の授業立案に際し、地域にある科学技術に関連した多様な施設や設備、研究機関等と連携した学習活動の有効性に気づく契機となっていることが示唆される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 大貫麻美・藤平洋子、文意を正確に伝える表現力の向上をめざして—学校ボランティア報告書に見られる誤表記の分析—、帝京平成大学紀要、査読無、Vol. 21、No. 2、2010、pp. 155-166

② 大貫麻美、大学生の科学に関する認識とそれと呼応した実践—帝京平成大学現代ライフ学部児童学科における取り組み—、帝京平成大学紀要、査読無、Vol. 22、No. 1、2011、pp. 1-9.

③ 大貫麻美、瀧澤繁雄、中村勉、小林賢司、

渋谷誠司、武澤隆、小学校における大学生による学校ボランティア活動の有効性と活動が初年次学生に与える影響—帝京平成大学現代ライフ学部児童学科における実践—、帝京平成大学紀要、査読無、Vol. 22、No. 1、2011、pp. 21-28.

〔学会発表〕(計1件)

① 大貫麻美、学校ボランティア活動に伴う大学1年生の意識の変容、初年次教育学会第3回大会、高千穂大学、2011.

〔その他〕

帝京平成大学現代ライフ学部児童学科が2011年に作成した印刷物『児童学科研究論集』(第1号)において、本研究成果に関し以下の2件を発表。

① 菅井勝雄・大貫麻美、正統的周辺参加論からみた学校ボランティア活動の在り方、pp. 17-30、2011.

② 大貫麻美、地域との連携協力を取り入れた教員養成の在り方、pp. 59-66、2011.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

大貫麻美 (OHNUKI ASAMI)

帝京平成大学・現代ライフ学部・講師

研究者番号：40531166

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

なし